



ひと部屋の明かり

しっち そのこ
【悉知 園子・東京都】

ただ待っているだけだった。小さいいのちが自ら流れ落ちることを。誰もがそれが最もいい選択だと思っていた。

いつものように早朝の5時、深夜勤の3回目の巡回をしていた。外はまだ明け方には早かった。個室の前を通りかかると、明かりのついている部屋が一つ見えた。

その部屋には、妊娠中期に入ったばかりのAさんがいた。破水が起こり、医師から「このまま胎児が順調に育つことは無理でしょう」と話があった方だ。ただ陣痛が起こるのを待つだけだった。私は部屋から漏れる明かりの意味を知りたくて、全ての患者さんを巡回してからまたその部屋に戻りノックをした。

Aさんはベッドに横になっていた。早くこの状態が終わってほしいのではと私は考えていた。しかしAさんはこう言葉を発した。「お腹の赤ちゃんって今、元気でしょうか」と。Aさんはなるべく静かに動いていた。赤ちゃんを気遣うように。私ははっとした。

私はAさんと胎児の心音を聴いてみることにした。すると、力強くドンドンドンと心音が聴診器から聴こえてきた。元気だ！ 破水してから1週間たっているのに、こんなに元気だ。母体も問題ない。赤ちゃんは生きたいのだ。

朝、すぐ医師にAさんの状態と意思を伝えた。その後、検査などを終え、受け入れ先が見つかり大学病院へ搬送となった。妊娠末期に入り、赤ちゃんは無事に産まれたとのことだった。

その後しばらくたってから、Aさんが病棟に赤ちゃんと会いに来てくれた。きらきらした瞳。あの日、部屋の明かりの意味を探らなかったら、この子は今いなかったのかもしれない。私は看護をする中で、いつも一つ一つの意味を考えているだろうか、あの部屋の明かりのように…。

忘れてはいけない「看護の心」を深く刻みつけたその赤ちゃんの誕生日には、写真付きメールが毎年届く。